

Title	サンスクリット古典文学の人間像（その1）：カーリ ダーサ作『ラグ王統譜』より
Author(s)	高橋, 明
Citation	大阪外国語大学論集. 12 p.189-p.199
Issue Date	1995-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79663
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

サンスクリット古典文学の人間像（その1）

—カーリダーサ作『ラグ王統譜』より

高 橋 明

Human Images of Classical Sanskrit Literature (1)

—— From Kalidasa's *Raghuvamśa*

Akira TAKAHASHI

Kalidasa, the most celebrated poet throughout the long history of Indian literature, depicted the glorious history of the Raghu race in *Raghuvamśa*. In this somewhat long epic the first three kings, Dilipa, Raghu, and Aja and the last king, Agnivarna provide interesting examples of human images of the warrior class of ancient India, in spite of a kind of one-dimensionality of their characters.

They are usually ideal kings, fathers and husbands and sometimes ideal lovers too. Thus the strict observance of the moral precepts of their time and class is common to all of them except for Agnivarna, who was a typical debauchee and died from consumption caused by excessive debauchery.

The aim of this article is to show some examples of typical human images from some major works of classical Sanskrit literature in order to examine whether the strong and peculiar obsession to the moral code, which is one of the most striking characters of modern Indian literature, is also found out in classical Sanskrit literature or not.

はじめに

一般にわれわれ日本文学に親しんだ者にとっては、善人も悪人も同じ人間であり、そうした人間を善も悪も含めて描くものが文学であるが、現代インドの文学者にとっては善人だけが人間であり、人間の善を描くものだけが文学である。美醜でいえば、美にのみかまけて、醜をかえりみない。正しいものはつねに美しく、美しいものもつねに正しい。モラルの点からいえば、社会的

規範がなによりも優先され、個人のひそやかな悪徳への関心は抑圧される。これらはすべて近代以降のヒンディー文学に顕著な特徴である。現代文学のこうした著しい倫理的性格が、インドの古典文学にも見られる伝統的特徴であるかどうかを、サンスクリット古典文学の主要な作品のいくつかから、典型的な人間像をとりあげて、検証するのが小論の目的である。

I

サンスクリット古典文学を代表する詩人カーリダーサ（Kālidāsa, 5世紀頃?, 以下、Kと略す）による Mahākāvya と称される美文体叙事詩『ラグ王統譜』*Raghuvamśa*（以下、Rと略す）は、古今を通じてインド文学中の最高傑作の一つに数えられてきた作品である。19章、1567詩節からなり、1～9章は Dilipa, Raghu, Aja, Daśaratha の4王の記述にあてられ、10～15章で史上名高い Rāma 伝説が物語られる。残りの4章において Rāma 以降の26王の軌跡が、数人の例外を除いて、駆け足で語られる。これらの王は、荒淫のために世継ぎを見ないままに死ぬ最後の王 Agnivarṇa を除けば、いずれも古典時代の理想的君主であり、武人である。

以下、どのような人間像が描かれているか、最初の3王と、最後の1王の、計4人を取り上げ、例を挙げながら順を追って見て行くことにするが、その前に論述の前提となるべき事柄を述べておく。

第一に、Rの物語は、純然たる歴史的事実をもとにしているわけでもなければ、かといって詩人によるまったくの創作でもなく、すべてはヒンドゥー教の神話世界のできごとを下敷きにしている。たとえば、Daśaratha 王は最愛の息子との別離の悲しみから悶死する（Ⅻ-10）という人間的な一面をもちながら、その統治は約1万年の長きにおよんでいる（Ⅹ-1）。ことに Daśaratha の息子で、神の化身として今日もインドで広く信仰されている Rāma 王の行状については、そのすべてを神話そのものの繰り返しと受けとるよりしかたがない。そのために、Rの中心的部分であり、分量からいってももっとも長い部分でありながら、ラーマーヤナに基づいた物語に登場する Daśaratha 以降の王たちは、ここでは考察の対象にしない。

第二に、17章 Athiti から、18章 Sudarśana までの、22王についての描写は単調な繰り返しのみ多いため、やはりここでは扱わない。

II

ラグ王家

個々の王の物語が始まる前に、ラグ家の諸王に共通する、大意次のような美質が述べられる。

生まれてより汚れなく、行為は必ず成果をもたらし

領土は海におよび、戦車は天に通ず (I-5)
 誤りなく祭儀を執行し、望むままに布施を与え
 罪にふさわしく罰し、時に応じて行動する (I-6)
 与えるために富をたくわえ、真実のために言葉少なく
 名声のために征服し、子を得るために娶る (I-7)
 幼くして学問を学び、若くして快楽を楽しみ
 老いては苦行者となり、最後にヨーガにより死に至る (I-8)

特に (I-8) の記述は、人生を āsrama と呼ばれる四つの住期にわけ、インド社会の伝統的規範をそのままに述べている。しかし、Rの全体を見て、これらの美德と規範を完璧に体现しているといえるのは、ヴィシュヌ神の化身である Rāma よりも、むしろ物語の冒頭に登場する王 Dilīpa である。

Dilīpa 王

Dilīpa に対する称賛は I-13~30にわたっている。これを見れば、理想的君主の姿がどのようなものとされていたか知ることができる。大意は以下の通り。

分厚い胸に、雄牛の肩、娑羅^{さらか}の木のように高い背に、長い腕
 武人の義務が、おのれの務めを果たさんと宿った体 (I-13)
 須弥山のように、おのれの力と光輝と高さによって、他のすべてを圧倒して
 彼は大地にそびえ立つ (I-14)
 肉体にふさわしい知恵、知恵にふさわしい知識
 知識にふさわしい行為、行為にふさわしい成果 (I-15)
 恐ろしくもまた好ましくもある徳のゆえに、臣下にとって彼の王は
 海獣と宝石の海のように、近寄りがたくもあれば、近しくもある (I-16)
 王の統治のもと、御者に従う車のように、始祖マヌの定めた道から
 毛はども臣民は逸脱することなし (I-17)
 臣民の幸福のために彼は税をとる
 太陽が千倍にして返すために (大地から) 水を吸い上げるがごとし (I-18)
 軍隊は飾りにして、彼の統治の手段は次の二つ
 学問に通じた知恵と弓に張った弦 (I-19)
 彼の隠された意図、表情、しぐさの意味は、事成って後、そうと知られる
 報いを見てはじめて前世の行為が知られるように (I-20)
 恐れなくしてわが身を守り、健康でありながら宗教儀礼をとり行い

無欲にして富をたくわえ、執着せずして快樂を楽しむ (I-21)
知識と沈黙、力と許し、布施と謙虚な心
たがいに結びつく美德はあたかも生まれを同じくする (I-22)
快樂にひかれず、諸学問に通じ
ダルマに専念する彼は、老いなくして、円熟を得る (I-23)
臣民を従わせ、守り、育てる彼こそは真の父
彼らの父はただ生みの親というのみ (I-24)
秩序のために罰すべきを罰し、子を得るために結婚する
賢者たる彼にとっては、利得と愛欲も正義のため (I-25)
供儀のために彼は地を搾り、インドラ神は穀物のために天を搾る
かくたがいに富をやり取りしつつ、両者は両界をささえる (I-26)
臣民を守る彼の名声には、他の王たちは届きたい
他人の財から遠ざけられ、盗みはただ言葉のうえで耳にするのみ (I-27)
病人にとっての薬のように、敵であっても、正しい者は重んじられ
蛇にかまれた指のように、愛^{いと}しくはあっても、邪まな者は遠ざけられるべし (I-28)
ブラフマ神は確かに彼を5大要素(地、水、火、風、空)をもって作った
彼の美德は、それゆえにすべて他者のために存在する (I-29)
海岸線を城壁に、海を堀とし
唯一の支配者として、彼はあたかも一都市のように大地を支配する (I-30)

正妃 Sudakṣiṇā とのあいだに世継ぎが生まれなことから、王と王妃は帝師 Vasiṣṭha の苦行林におもむく。Vasiṣṭha は、聖なる雌牛に対して、かつて王がそれと知らずに礼を失したことがあり、そのため聖牛の呪いを受けて、男児に恵まれないのだと不妊の原因を解き明かす。雌牛の仔で、同じく神通力をもつ別の雌牛に奉仕することによって、子を得ることができると語る。妻とともに21日間雌牛に仕えた彼が、ヒマラヤ山中でライオンに襲われた雌牛の身代わりに、わが身を差し出そうとしたとき、呪いは解ける。雌牛の乳を飲むことによって王妃は Raghu をみごもる (I~II)。成人した Raghu に王位を譲り、Dilīpa は王妃を連れて、苦行のために森に隠棲する (III-70)。また、やがて寿命がつきて天に上ったことも暗示されている (III-69)

君主として、武人として、理想的であっただけではなく、Dilīpa は夫としても、父としても慈しみ深い人物として描かれている。

そもそも大規模な後宮をもちながら、彼は正妃 Sudakṣiṇā がいればこそ自らを妻あるものと考えている (I-32)。彼女は Magadha 国の出身であったが、王は名家の女との間の息子は現世でも、来世でも人を幸福にするものだといっている (I-69)。つがいの仲の良さで知られるアカツクシガモのような二人の互いにたいする愛情は、息子を得ていっそう深まった (III-24)。

Vasiṣṭha に会いに行く途中で、彼は王妃に対して、こまやかな心づかいを示す。道々、景色を妻に指し示しながら、彼はいつ道中が終わったのかにも気づかないほどであった (I-47)。馬車から下りるときにも彼は妻に手を貸す (I-57)。雌牛に奉仕する際にも、彼は妻を気づかって、森に同行しようとはしない (II-3)。妊娠した妻にも、遠慮から欲しいものを直接いえないようでは困るからと、侍女たちにわざわざたずねさせている (III-5)。

乳母に手を引かれ、カタコトをしゃべり、かつ父に対して礼を忘れない息子を見て、彼は喜ぶ (III-25)。特に幼い息子を膝に抱いて、目を細めて父親としての幸福にひたっている Dīlīpa 王の姿は、全編の中でももっとも印象深い詩節の一つである (III-26)。

人間ばかりか、周囲の生き物たちにも彼がやさしい配慮をしていることをうかがわせる箇所がある。苦行林につくと、彼は御者にまず馬たちを休ませよと命じる (I-54)。鹿たちも、彼のやさしい心を知って、彼が弓を帯びているにもかかわらず遠くへ逃げようとはしない (II-11)。ライオンに食われようとしている雌牛の、おびえた目を見て、彼は苦しむ者を救うことこそが武人の義務である。義務に背いて、国を保ち、命ながらえて何の甲斐があろうとわが身を身代わりにすることを決心する (II-52~53)。敵であるべき、そのライオンに向かってさえ、いったん言葉を交わせばすでにたがいに友である、友の頼みを聞いてくれという (II-58)。

さらに王は、正しいだけではなく、その外見からも美しい人物であった。武人として、たくましい肉体をしていることはすでに引用した箇所からもあきらかであるが、それだけではない。苦行林への途中で、出会った鹿のつがいの目は、王と王妃の目の美しさに匹敵するものであった (I-40)。二人は、途中の池の蓮の花の匂いに、自分たちの息の匂いと同じものを嗅ぐ (I-43)。雌牛を守護しながら、森から帰途につく王の力強い体を運ぶ、優美な足の動きに、道そのものが美しく飾られる (II-18)。彼の指の爪は光輝き (II-31)、苦行のためにやつれた顔も、ひさかたぶりに王を迎える都の人々にとっては、上ったばかりの月のように美しい (II-73)。

武士階級の人間に要求される美德をすべて備えるだけではなく、一方で節制と禁欲を知る彼は、国という名の苦行林で、苦行をする行者にもたとえられている (I-58)。そのうえたくましく、かつ美しい肉体の持ち主として、人生の快楽の享受の資格においても欠けるところがない。現代の読者にはかえって反感をまねきかねないような完全無欠な人間像であるが、実際にはむしろ好ましい印象を受ける。一つには、妻と息子に対する彼の愛情が、人間らしい真情にあふれたものであり、現実にはありえない理想的な人間像でありながら、上に例を挙げたような細部にわたる自然な描写のせいで、道徳の化け物であるかのような印象を受けないことがある。

さらに、これほど完璧な人間が、そもそも雌牛に呪いを受けたのは、月経を終えた後沐浴によって体を清めた王妃との交わり（それ自体は宗教慣習上の義務であったが）のことを考えていて、たまたま近くにいた牛に気づかなかったという、いささかこっけいな事件が発端であったということがある。久米の仙人的な諧謔を感じさせられる箇所である。

また、その呪いの結果、長く子宝に恵まれなかったこと。世継ぎを得るために、もう少しで命

を落とす苦行に務めなければならなくなったなど、読者の同情を得るにたる事件もあった。

R全体の中でも、短いながら Dilipa 王の物語は、その劇的完成度においてもっとも優れている。Dilipa 王は、成熟した、堂々たる男性の理想像として、Kの創造した人間たちの中で、女性の理想像たるシャクンタラー姫とならんで、記憶される価値のある人物である。

Raghu王

Raghu の生涯でもっとも重要な出来事として、詩人が力を込めて描いたのが、彼の世界制覇の大事業であることはまちがいない（Ⅳ－26～88）。実質的に第4章のすべてをそれに費やしていることからそれがわかる。KによるR創作の動機をあきらかにし、またRの中になんらかの歴史的事実を見ようとする場合には重要な示唆に富んだ箇所であるが、残念ながらRaghuの人物像は征服事業の陰にまったく隠れてしまっている。

父 Dilipa と違って、そもそも Raghu は周囲の人間たちとの接点が少ない。彼の人間性をうかがわせるエピソードは、皇太子となった彼が父の100回目の馬祠祭の馬をインドラ神に奪われて、それをとりかえすために神と戦ったこと（Ⅱ－38～69）。世界制覇の後、それに関する大供儀を行い、征服で得たすべての財物を布施しつくして、彼の倉はまったくの空になってしまった。そこへ、遅れてやってきた一人のバラモンが、自分の師匠に与えると約束した礼の大金を Raghu に乞うた。布施を求めてきたものをむなしく帰す不名誉を恐れた王は、ヒマラヤに住む財宝の神クベーラから、富を強奪しようとするが、いち早くそれを知った神は、神通力で王の倉を財宝で満たす。喜んだバラモンの祝福で、彼は息子 Aja を授かる（Ⅴ－1～35）。この二つがあるだけである。

最初のエピソードでは父の命に忠実で、勇敢な息子としての Raghu が描かれ、後のエピソードでは、布施をする気前の良い王としての彼のスケールの大きさが強調されている。しかし、インドラ神との戦いにしても、Dilipa とライオンとが対峙したときのような緊迫感にかけている。わずかに、他人の馬を盗む、どこかうさんくさいインドラ神を相手にして、堂々の弁論を述べるところ、あるいは後段のエピソードの中で、てっとり早く財宝を得る手段として、クベーラ神から奪い取ろうと思い立つところなどに、Raghuの武人らしい、勇猛果敢で率直な性格をわずかに見ることができるのみである。

Aja の母となる女性はその名前も明らかにされていない。ラグ王家のしきたり通り、成人した息子に位を譲った後、ヨーガの行を経て、死ぬが（Ⅲ－24）、すでに物語の中心は Aja 王に移っており、その最後も特に印象深いものではない。Raghu は、息子に恵まれなかった父 Dilipa や、最愛の妃を失った息子 Aja のように、その一生においてなんらかの障害に出合うということが一度もなかった。いわば完全な人間が、完全な人生を全うしたわけで、世界制覇の大事業を達成し、Rの題名にもその名を残しながら、一人の人間としての印象の薄いこととの落差ははなはだしい。

Aja王

Vidarbha 国王の妹 Indumatī の婿選びの式に参加した Aja は、数多くのライバルをおしのけて、晴れて彼女の夫に選ばれる (V-39~VI)。彼に対して恨みを含む恋敵たちは、結婚式の後、花嫁を従えて帰途につく彼を待ちぶせる。激しい戦いの後、敵を打ち負かした Aja は都に凱旋する (VII)。若い夫婦は幸せな毎日を送るが、ある日、空から降ってきた花輪に打たれて、Indumatī は死んでしまう。帝師 Vasiṣṭha の慰めにもかかわらず、悲嘆に暮れる Aja は、サラユー川とガンジス川との合流する聖地で、断食によって肉体を離れ、天上に上る (VII)。

婿選びの場面は、それ自体興味深いものであるが、Aja の人間をうかがわせる記述はほとんどない。わずかに式を翌日にひかえて、夜遅くまで彼が眠れないでいること (V-64)、いよいよ Indumatī が彼に近づいたとき、はたして自分を選んでくれるかどうか不安におちいること (VI-68) などである。純情というべきか。

戦いの描写も、Raghu の世界制覇とは違って、具体的で、臨場感もあれば、ユーモラスな場面もある。しかし、Aja に関していえば見るべき描写はほとんど何もない。

一方、彼の外面的な美しさの描写については、随所に例がある。彼は、ヒンドゥー神話のキューピッドであるカーマデーヴァにたとえられる (V-63)。また、生まれ変わったカーマデーヴァのような Aja の美しさを見て、他の王たちは Indumatī を得る希望を失う (VI-2)。婿選びの式の朝を迎えた彼を目覚めさせるための称賛の歌の中では、Aja の美しさはまるで女性のもののようである。肉付きのよい肩には夜の間にイヤリングの跡がつき、ベッドシートにこすれて、体につけた化粧のための香料も落ちてしまった (V-65)。くるくると回る瞳をした彼の目は、花びらの中に黒蜂を閉じ込めた蓮の花のように美しい (V-68)。彼の息の匂いは、こぼれる木の花と、朝日に咲きそめる蓮華の匂いのかぐわしい (V-69)。赤い木の芽に落ちた、首飾りの真珠のように白い朝露は、Aja の赤い下唇に、白い歯の光とともにこぼれた、艶かしい笑みのように美しい (V-70)、などなど。

しかし、Aja に関してもっとも注目すべき点は、彼が唯一人間の弱さを露呈している人物ということである。確かに、Daśaratha 王も狩猟の道楽に耽り、それがため行者の呪いを受け、やがては最愛の息子を手放す悲しみにたえられず死ぬ。だが、『ラグ王統譜』ではその悲しみの描写はおざなりなもので、わずか一詩節ですまされている (XII-10)。それに比べて、王妃を失った Aja の嘆きはその独白だけで、26詩節に及んでいる (VII-44~69)。

彼は、どうしても生き返らない王妃を見て、生来の剛毅を捨て、滂沱の涙を流す。K はいう、鉄でさえも (苦) 熱に会えば溶ける、まして人の身においてや、と (VII-43)。王妃の遺体を荼毘に付すために、お付きの者たちは遺骸を王の膝からむりやり引き離さなければならなかった (VII-71)。命のはかなさをさまざまに説き聞かせる Vasiṣṭha の伝言を聞いても、Aja 王の心はまったく慰むことがない (VII-91)。悲しみのあまり王妃の後を追って死んだといわれることを恐れ、また王子がまだ幼かったことから、彼は王妃の肖像画と、夢の中での短い再会だけを

心の支えに、その後8年を生き延びる（VII-72,92）。しかし、息子が成人したのを見届けた頃、彼は鷲が建物を侵食するように、耐え難い苦しみを受け続けたために、不治の病に取りつかれるが、それも彼にとっては亡き妻と再び会えることを思えば、かえって好ましいことであった（VII-93~94）。聖地で断食によって死んだ彼は、天上に赴き、かつての妻と再会する（VII-94~95）。

ラグ家の他の王たちと比べて、Ajaのこの悲しみの人間的な魅力は群を抜いている。近代の文学に特徴的な精緻な心理描写はなくとも、Ajaの独白とその後の行動との一致が、いいかえれば言葉と行為との古典的な一致が、感情の真実と力強さを十分に伝えてくれる。

しかし、だからといってAjaが理想的な王の枠からはずれているというわけではない。彼の悲しみの中に人間的な魅力はもちろんあるが、それを社会的な規範と人間の真実との対立という、現代のわれわれにとってなじみの深い視点から解釈することはあやまりである。Kにとってはそのような対立などそもそも存在していなかった。その証拠に、結婚の目的は息子を得るためとする、ラグ家の武人に課せられた規範に、Ajaは一見すると背いているようだが、息子 Daśaratha を得て、先祖にたいする義務を果たしたとの記述が一方にある（VII-28~30）。統治その他についての言及は少ないが、妻にたいする愛におぼれて、政治の義務をおろそかにした様子はない。Indumatīとの戯れの描写についても、度を過ぎて官能的なものは見られない。Ajaの深い愛情が正妻に対するものであったことも忘れてはならない。愛情ゆえにわが身を滅ぼすとはいえ、その死は肯定的にとらえられている。後事を成人した息子に託し、聖地で断食によって肉体を捨てた後、彼は天上界に再生し妻と再会し、幸福に暮らすのである。

要するに、Kは Dilipa によってすべての面で円満な人間の理想像を、Raghu によって覇王の理想像を、Aja によって恋する武人の理想像を描いたというべきである。Aja は婿選びの式によって女の側からまず選ばれたとはいえ、ライバルたちを戦いで打ち負かして初めて彼女を本当に手中にした。けっしてひよわな恋人ではない。彼によって、理想的王侯のひとつの典型的な人間像が示されたのである。

Agnivarna王

最後に登場する Agnivarna 王は、R 全編中もっとも特異な人物である。父によって敵を除かれた王国を受け継いだ彼にとっては、国とは守るものではなく、まずなによりも享受すべきものであった（XIX-3）。身分の上下を問わず、手あたりしだいに女を求めた彼は、政治をまったくかえりみなかった（XIX-47）。やがて、過度の房事のために、体をこわしながら、医者言葉聞き入れず、ついに肺病のため子を見ぬまま死んでしまう（XIX-48~53）。大臣たちは、病気が広まらないように、彼の遺体を王宮の庭でこっそりと火葬にする（XIX-54）。血統そのものは、身ごもった王妃の一人が玉座についたことで、その後も続くことが暗示されているが、『ラグ王統譜』最後の王としては、いかにもさびしい死に方である。

十分な後宮をもちながら、つぎつぎに新しい女を求める彼の様子は、Kの戯曲 *Mālavikā*

gnimitra の Agnimitra 王の姿を彷彿させる。Agnivārṇa が特異という理由は、彼が Dilīpa、Rāma の血をひくラグ王家に属する王でありながら、彼以前の理想的人物像の枠から、ひとりはずれているためである。

なぜ K がこのような王を物語の最後で描いたのかは謎であるが、すくなくとも K の同情が Agnivārṇa にないことだけはあきらかである。誕生から成人となるまでの記述がまったくない。死に至る経過についても K の筆は冷淡そのものである。これを見れば、Agnivārṇa をたとえば反理想的な人物として、そこに何かの意味を認め、積極的に描こうという意図が K にあったとは思われない。

しかし、今日のインドの文学に親しんだ目から、Agnivārṇa を眺めると、そこに新鮮な驚きがある。それは彼が、おおっぴらに好色な人間として描かれているという事実である。肯定的にとらえようと、否定的にとらえようと、事実として性愛に耽る人間を克明に描くということは、現代インド文学では希有のことである。K が Agnivārṇa に対して好意的でないことは確かだが、王の好色振りを描くこと自体には抵抗を感じていないこともまたまちがいない。K は男女の性交の特殊な体位の一つにさえ言及しているのである (XIX-32)。王の姿に仮託して、詩人自らの性愛に関する知識を披瀝するという目的があったためと思われるが、その大らかさはなんといっても注目に値する。昔も今もどこにでもいるはずの好色、淫蕩な人物像が、現代のインド文学にはどこにも見られず、1500年も前の作品の中でしか見られないというのは、文化の不思議な断絶というべきであろう。現代インド文学のもつ性的問題に関する極度の潔癖性は、古典時代のインド文学には無縁のものであった。

そのような視点から Agnivārṇa を見なおしてみると、彼は興味ある人物像を提供してくれている。大臣たちから臣民が拝謁したがっていると懇願されると、彼は窓から片足を突き出して見せた (XIX-7)。逢引の相手をわざと待たせて、そのじれる様子を盗み聞きする (XIX-18)。王妃たちにばれる恐れから、侍女と交わりながら、彼はふるえている (XIX-23)。別の女に会いに行くために、そそくさとわきから逃れようとして、女にののしられ、髪をつかんで引き止められる (XIX-31)。夜を徹して女に接し、昼間は寝てばかり (XIX-34)。医者に止められても、いっこうに女を慎もうとせず、あげくに衰えきって死んでしまう (XIX-48~53)。性愛描写自体は R 以外にも、K の別の Mahākāvya である、*Kumārasambhava* にも相当に濃厚なものがある。また、そうした表現がかならずしもすべて K の独創ではなく、当時の文学表現上の定形にしたがった部分も多いであろう。しかし、ところどころにあるかなり際どい細部にわたる描写を含む Agnivārṇa 王の姿は、性愛に淫した人物像の一典型として重要なものであることにかわりはない。

おわりに

今回とりあげた 4 人の王は、いずれもなんらかの枠にはめられた典型的な人物像であって、独

立した個性の陰影と深みを欠いている。Agnivarna 王を除けば、それぞれ理想化の程度がはなはだしく、読者にとっては基本的にはただ仰ぎ見るしかない人物である。Dilipa、Aja はともかく、Raghu 王に関してはその典型としての造形さえも不十分である。Agnivarna についても、彼の人間そのものを描くことに K が関心を持っていたとは思えない。その意味で、現代インド文学に日頃感じている不満、すなわちモラルの偏重による浅薄な人間理解にたいする不満を、ここでも覚えざるを得ない。一方で、性愛に関する両者の態度には相当な開きがあり、現代文学の道学的態度がいつ、どこから生まれたものか、これはこれで興味深い問題である。

性愛描写に関する大らかさを別にすれば、人間が自分の属する階級と社会の規範と道徳にたいして、忠実であることが要求されているという点で、R に描かれた理想的王たちの姿は、現代インド文学の中の、正義ばかりを好む登場人物たちと本質的に共通するものを含んでいる。R には、本来苦行の権利をもたないシュードラ階級の男が、神の地位を得ようと人知れぬ森で苦行をしたところ、何の関係もないバラモン階級の男の幼い息子が死ぬという挿話が描かれている。Rāma 王はシュードラを殺し、死んだ子供は生き返る（XV-42～57）。ここでは誰か社会の規範を破る者がいれば、たとえその行為が行為自体としては他のどの個人とも関わりのないものであっても、それによってただちに現実の社会悪が生じるという思想が表明されている。いわば社会全体の秩序・安寧の維持と、一人一人のきわめて個人的な行為とが有機的に結びついているのである。

シュードラにはシュードラの義務があり、武士には武士の義務があるとすれば、バラモンたる文学者、詩人にもまた守るべき義務と規範があるはずで、それから逸脱することは社会全体に害毒を及ぼすことになる、K 自身が考えていなかっただろうか。また、現代の文学者たちもほぼ同じことを半ば無意識にでも考えていないだろうか。R において理想的王侯のあるべき姿を描いた K の心中には、宮廷詩人として眼前のパトロンを喜ばせるという目的とは別に、詩人として社会にたいして当然の義務を果たしているという意識がなかっただろうか。現代のインドの詩人が、むき出しに社会正義を唱えるとき、彼の心中にさまざまな現世的な欲望とは別に、社会にたいするこの伝統的な責任の意識が潜んではいないだろうか。一国の現代文学と古典文学との間に、ある一貫する性格が見られることはむしろ当然であるとすれば、あるがままの人間像よりもあるべき人間像への偏愛という R に顕著な傾向は、現代文学の理解にあたっても、貴重な示唆をあたえてくれる。

注

テキストとして、

Dvivedī, Revāprasād. (ed.), *Kālidāsa—Granthāvalī*, Kāśī Hindū Viśvavidyālaya, Vārāṇasī, 2nd ed., 1986.

を使用した他、読解に当たっては、

Nandargikar, Gopal Raghunath. (ed.), *The Raghuvamśa of Kālidāsa*, Motilal Banarasi Dass, Delhi, 5th ed., 1982.

Caturvedī, Sītārām. (ed.), *Kālidāsa—Granthāvalī*, Caukhambā Surabhārati Prakāśan, Vārāṇasī, 4th ed., 1980.

の2書を参考にした。

その他の参考文献については、小論の最後一括して紹介する予定であるが、なお次の概説書、および、カーリダーサ戯曲の翻訳書については、この場でその名を挙げておく。

辻 直四郎 『サンスクリット文学史』、岩波書店、第2刷、1974。

辻 直四郎 『シャクンタラー姫』、岩波文庫、1977。

大地原 豊 『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王』、岩波文庫、1989。

(1994. 9. 16 受理)